

# 再開後の学校運営



## 新学期を迎えて

4月1日、JR神戸—大阪間が復旧し、姫路から大阪まで被災地が1本につながった。復興に向けての本格的な歩みが始まった。この時期と前後して、高野連は、春の選抜高校野球大会を被災地の真っ只中にある甲子園球場で行うか否かに迷いながらも、復興への強い願いを込めて開催に踏み切った。例年の華やかさこそなかったものの「復興・勇気・希望」を胸に、球児たちの懸命にプレーする姿が、被災地に生きる人々への大きな励ましと勇気を与えた。

震災から3か月が経過した。学校では、新学期に入り、教育活動の正常化に向けた精力的な努力が続けられた。震災後、遠くの学校に疎開していた児童が元気に戻ってきたり、慣れない仮設住宅からの通学する生徒の表情にも心なしかゆとりが生じ、

校庭や教室に以前の子もたちの明るい笑顔が戻ってきた。

しかし、教育活動正常化への道りは各市町の取り組みや地域の実情等により様々であった。避難所の解消や縮小が順調に進み、教育活動の回復に弾みのかかる学校が増える一方で、依然として多くの避難住民を擁し、解消への見通しが立たない学校では、先行きへの不安や多くの課題を抱えたまま新学期を迎えた。思うように捗らない教育機能の回復と避難住民の生活保障という現実の狭間で、学校は往きつ戻りつしながら避難所との共存を目指す日々が続いた。

## 避難所の解消

こうした中で、神戸市内では、私立高校に避難していた住民に新年度の初め、近くの公立学校への避難所移動の通告を出したところ、避難住

民との間でトラブルが発生し、囚らずも避難所解消の道の難しさを見せつける結果となった。

しかし、その一方で、避難所の閉鎖に当たって避難住民による感謝の大掃除が行われたり、互いに労をねぎらうお別れ会が開かれるなど、学校と地域の人々とのつながりが深まったところも多い。例えば、長田区の県立長田高校では、ピーク時に約2000人の避難住民が生活し、一日約100人のボランティアが活動していたが、残っていた住民全員の移転の目処がついた8月17日に、それまで同校に避難していた住民やボランティアを招待して交流パーティを開催するなど、和やかな雰囲気の中で避難所としての役割を終えたのである。震災直後には苛立つ住民から怒鳴られながらも、何日も学校に泊り込んで様々な対応に追われた日々。しかし、最後には、住民自らがテントの



交流パーティ（県立長田高校）

後片付けや教室の掃除を行うなど、学校への感謝の気持ちを表して去っていく人が多かった。

### 教育復興への道

同じ長田区にあっても県立兵庫高校の場合は事情がかなり違っている。

兵庫高校周辺は震災規模が最も大きかった地域の一つで、ピーク時には普通教室や体育館、通路などに2500人が避難。2月上旬に学校を再開した際にも1000人を超す避難住民がいたため、1年生は北区の県立神戸甲北高校へ、2年生は同区県立鈴

蘭台高校の施設を借りて授業を始めた。4月に新入生を迎えてからは、全校生が同区の県立鈴蘭台西高校に移り同校敷地内に建てられた仮設校舎で授業を再開し、教頭も2人体制を取った。

この後、避難住民の減少に伴い、その数が600人に減った段階で3年生のみ6月5日に一足早く本校復帰を果たしたのである。

神戸市内の避難所が解消された8月20日の後にも一部普通教室や体育館等の施設が避難住民の生活の場として使用されていたため、9月1日からの1・2年生の復帰は後にずれ

込み、ほぼ一月遅れの9月26日、全校生が8か月ぶりに長田区の兵庫高校に顔をそろえたのであった。本県教育史においても大きな節目の日であった。

前日の25日には、両校が「お別れ会」を開いて、互いのエールを交換している。他校の敷地を借りての教育活動には何かと課題も多く、トラブルの生じやすいものであるが、兵庫高校上田校長、鈴蘭台西高校石井校長をはじめ両校教職員の相互理解と尽力により難局を乗り越えたのであった。同一敷地内に二つの全日制高校が併存するという極めて特異な

#### ■避難所が閉鎖された日

市町名	月	日	市町名	月	日
神戸市	8	20	三木市	3	16
西宮市	7	31	洲本市	2	21
尼崎市	6	15	津名町	3	27
芦屋市	6	18	淡路町	3	15
宝塚市	5	21	北淡町	4	10
伊丹市	5	1	一宮町	4	5
川西市	4	16	五色町	3	31
明石市	4	16	東浦町	4	7

※神戸市は8月20日以降は避難所を廃止し、待機所12か所を指定して、学校から待機所に移動するよう説得を続けている。

#### ■県立学校における避難所の解消日

校名	月	日
舞子高等学校	1	29
伊丹西高等学校	2	13
西宮高等学校	3	29
盲学校	4	23
芦屋高等学校	5	28
星陵高等学校	6	12
兵庫工業高等学校	8	13
長田高等学校	8	20
御影高等学校	8	20
神戸高等学校	8	23
夢野台高等学校	10	3
兵庫高等学校	11	30

現在解消せず

## ■学校における避難者の状況（平成7年11月30日現在）

学校種	校名	人数	備考
高校	県立兵庫高等学校	23人	長田区
	神戸市立神港高等学校	12人	兵庫区
中学校	神戸市立湊川中学校	14人	兵庫区
	神戸市立兵庫中学校	9人	兵庫区
小学校	神戸市立御影小学校	1人	東灘区
	神戸市立高羽小学校	3人	灘区
	神戸市立六甲小学校	21人	灘区
	神戸市立灘小学校	13人	灘区
	神戸市立福住小学校	5人	灘区
	神戸市立稗田小学校	15人	灘区
	神戸市立摩耶小学校	8人	灘区

学校種	校名	人数	備考
	神戸市立西郷小学校	12人	灘区
	神戸市立荒田小学校	2人	兵庫区
	神戸市立会下山小学校	15人	兵庫区
	神戸市立東山小学校	2人	兵庫区
	神戸市立兵庫大開小学校	3人	兵庫区
	神戸市立水木小学校	35人	兵庫区
	神戸市立御蔵小学校	17人	長田区
	神戸市立志里池小学校	1人	長田区
	神戸市立丸山小学校	2人	長田区
養護学校	神戸市立青陽東養護学校	6人	灘区
合計	21校	219人	

学校形態であったが、両校の教職員や生徒が、そうした不自由な状況の中にあっても、震災という不幸な出来事をプラスに転化すべく互助互恵の精神を培い、互いに支え合い助け合って信頼と交流を深めることができたことは何よりの収穫であった。

### 海外からの支援

被災地の小学校5・6年生、50名がエールフランスグループ企業財団の招きにより、フランスを訪問し、自然の美しさや多くの人々の温かい

心に触れて、震災で受けた心の傷を癒したのは、春たけなわの3月末であった。

また、サハリン地震の際にわが国から寄せられた救援物資や救援金へのお礼とのことで駐大阪ロシア連邦総領事館などが中心となって、西宮市や神戸市の小中学生50人がモスクワに招待され、クレムリン宮殿などを見学した。夏休み期間を利用しての海外からの心温まる申し出であった。子どもたちは、こうした機会を通じて、世界の様々な国の仲間との絆を確認するとともに、互いに痛み

を分かち合うことの大切さ、人と人との絆に国境がないことを学んだように思う。

被災児童生徒のための各国からの主な申し出は以下のとおりであった。

## ■阪神・淡路大震災被災児童生徒のための夏休み特別プログラム

申し出団体名	期間	対象・人数	備考
チェコ政府	7月29日～8月10日	13日間 中学生70人	
スイスの民間企業	8月2日～8月11日	10日間 小学生24人	男女各12
ハバロフスク地方・社会諸問題委員会	8月4日～8月18日	15日間 中学生30人	
オーストラリア旅行業界	7月23日～8月9日	7日間 小学生100人	5グループに分割
ポーランド政府	7月26日～8月16日	21日間 小学生・中学生20人	
ロシア・グローバルレインボーシップ	8月4日～8月25日	8日間 小学生・中学生60人	2グループに分割

### 震災記録の編集

避難所運営に係わる業務の削減や解消に伴い、教職員が、本来の教育活動に専念できる時間が増えてくるに従って、それぞれの学校の歩みや子どもたちの体験を集めた記録集が編集されるようになる。記録が風化して忘れ去られてしまわないうちに整理し、次代への貴重な教訓として語り継ごうとの思いからであった。

震災直後に出された手書きの学校だよりや体験作文集、壁新聞などの緊迫した臨場感はないにしても、文面や行間から当時の様子や教職員の苦勞、子どもたちの思いがひしひしと伝わってくるものが多く、系統的にもよく整理され、体験者しか書けない現実を直視したすぐれたものが多い。

この他にも、西宮市の子どもたちだけでまとめた『はげましをありがとう—子どもたちの震災報告—』や、

生徒が自らの被災体験をキャンパスに描き、展示会を開催するなどそれぞれの目を通して見た震災を、地域に、全国に発信しようとする試みが増えていった。

### 教育活動を再開して

学校再開が比較的スムーズにいった学校においても、教具が整理されていなかったり避難所縮小に伴う保管場所の度重なる移動、また備品が損壊していたり、錆びていたりしていることも多く、特に理科などの実験がスムーズにできなかった学校が多いようだ。また、仮設校舎が運動場に建ったため、体育の内容が限定されてしまったり、体育大会を他の場所を借りて実施するために演技種目を減少せざるをえないなど、様々な制約を受けているのが現状である。

また、仮設校舎での教育環境は音が筒抜けになって隣どうしの教室で気を遣ったり、修理を要する校舎周

辺への立ち入りが禁止されているため、子どもたちの遊び場所が少ないという問題もある。子どもたちの様子にしても、以前に比べて何かしら落ち着きがなく、ものごとに集中できない子どもが増えているという報告もある。

しかしその一方で、震災体験を通して子どもたちは、命の大切さ、家族の絆、助け合う心、生きることのたくましさ、人とのふれあいといったお金では買えない大切なものをたくさん学んだと思われる。被災児童生徒の心のケアの充実とともに、震災から学んだものを今後の教育にどう生かしていくか、限られた条件の中での学校の模索はこれからも続く。



## ■県立盲学校における指導例に学ぶ

県立盲学校は、人数は少なかったが地震発生時に子どものいた学校の一つである。当日は連休明けで、17名の子どもが寄宿舎に戻っていた。寄宿舎には3名の寮母が泊まっていた。寮母はすでに起きており、地震と気づき部屋を出ようとする、激しい揺れ、地響きと共に、火災報知器のベルがなりだした。前の晩にストーブの消火を点検してあったため、すぐに子どものいる部屋をまわり、机の下にもぐるよう指示した。すでに真っ暗な中で廊下に出てきている子どももあり、一部屋ずつ子どもを押し込めた。揺れが収まり、子どもの動揺を鎮めるため一部屋に何人かずつ集めた。次に余震があることを考え、全員を1階ロビーに集めることにし、上着を羽織らせて避難させた。幸いに子どもの部屋と避難通路のガラスは割れていなかった。懐中電灯で通路の安全を確認しつつ安全に誘導できた。この学校では視覚障害の子どもをあずかっているため、特に入念な避難訓練を行っており、今回はこのことが役立ち、落ち着いて行動が出来たと報告している。ここでは年間5回の避難訓練を行っており、うち1回は夜8時頃地震を想定した訓練とし、他の4回は深夜火災を想定した訓練としている。うち何回かは訓練を点検する寮母を助け、マニュアル通りか、またマニュアルそのものの点検も行い評価を試みている。さらに1度は消防署立会いで訓練を行っている。視覚障害の人の行動の性質についても十分に考慮したマニュアルを検討しており、校長初め真摯な取り組みがこの成果を生んだという事ができ、今後の避難訓練の範を示している。

震災当日の様子を学校の報告から振り返ってみる。

1月16日、本校寄宿舎に帰ってきた寄宿生17名(南寮男子11名、北寮女子6名)泊まりの寮母3名。1月17日、午前5時46分、ドーンという爆発したような衝撃の後、激しい揺れがおそってきた。南寮1階にいた寮母は、非常ベルが鳴ったので火災報知器を確認。南寮3棟にランプが点灯。電灯をつけるがつかない。インターホンもつながらない。鳴り響く非常ベルに不安がっているだろう生徒に放送しようとするが停電のためできない。とにかく南寮3階へかけ上がる。幸い火災はなかった。その足で各部屋を回り、机の下へもぐるよう声をからす。寝ていた布団を引っ張り頭からかぶせたりもした。

南寮2階の寮母は、ただちに枕元の懐中電灯を肩に掛け、激しい揺れに足をとられながらも非常ベルが鳴り響く中、生徒の部屋へ向かう。まず安全確保のため、毛布をかぶり机の下に入るよう指

示して回った。多くの生徒はすでに机の下に入っていた。中には恐怖のあまりパニック状態に陥り、体が棒立ちになっている者、震えて動けなくなっている者もいた。気をしっかり持たせようと強い口調で叱咤激励し、なんとか机の下にもぐらせる。そして次の指示があるまで動かないよう指示する。

北寮の寮母も生徒の安全を確保した上で南寮へ向かった。3人で相談し、避難誘導のことを考え、生徒を男女別に一部屋に集めることにした。ただ自分の部屋を離れたがらない生徒に対しては無理強いしなかった。暖かい服装で指示した部屋に集まる。真っ暗な部屋には懐中電灯が一つあるだけだった。

その後、南寮1階ロビーに全員集合し、人員点呼した。全員けがもなく無事を確認する。その時の様子を一人の女生徒は作文に次のように綴っている。



「ドシン！」という音がしたと思うと、ガタガタと激しく揺れ始めました。その揺れはまるでジェット・コースターに乗っているような感覚でした。机の下に入ろうとしても揺れのものすごさのあまり、動くことができませんでした。同室のMちゃんに「どこにいるの？大丈夫？」と大声で話しかけ、無事だということを確認しました。真っ暗な中、Mちゃんを手探りで探して、腕をつかみ、にぎりました。こうすると一人でいるより安心して、少しずつ気持ちが落ち着いてきました。数十秒揺れた後「出口確保」が頭に浮かびました。戸を開けに行こうと思い、戸の方を見ると先程の揺れの勢いで開いていました。揺れが収まったので、暖かい服装をして女子6人が一つの部屋に集まりました。外はだいぶ明るくなっていますが、舎内は停電のまま。どうすればいいのかわからないし、頭の中はパニックでした。でもみんなといたのでだんだん落ち着いてきました。服を着替え、南寮へ行きました。ロビーを歩いて外に出ました。外には男子がたくさん出ていました。「もし、あのとき一人だったら、私は一体どうなっていたらう。」ふっとそんなことを思いました。寮母先生の指示にしたがって行動することができ、無事に避難することができましたが、もしこれが一人だったら……。一人じゃなくて、よかったです。

それぞれコートを着たり、毛布をかぶったり。いつでも避難できるように足元は運動靴のまま。寒さと恐怖、おなかもすいてがたがた震えてくる。ラジオのボリュームをいっばいに上げて、ニュースに耳を傾ける。時々やってくる余震に「わあっ、きたきた」「こわいー」寄宿舎の庭には避難住民が続々やって来る。生徒も外へ避難する。出勤してきた教職員からパン、ジュース、おにぎりの差し入れがあり、ほっと一息をつく。だんだん外が明るくなってくるとようやく安堵の気持ちがわいてきた。だが今度は家族のことが心配になり、電話をするが通じない。やっぱり不安、やっぱり怖かった。

「生徒の安全確保」という責任感から恐怖は感



じなかったが、のちのち神戸の状況を知ることになって『私一人だったら…』と恐怖感でいっぱいになる。普段の避難訓練(地震想定)による危機管理が実際非常に役立ち、その重要性を確認させられた」というのが、寮母の率直な感想である。

電気は午前10時に復旧した。水道・ガスはストップしたまま。食糧入手困難のため、寄宿舎生で可能なものは帰省させる。その結果在舎は3名となる。その間、男子は男子、女子は女子で一部屋にまとまって生活する。寄宿舎勤務表も組み替え、学校側教職員の応援も得て、常時5人の宿泊体制で生徒を見守った。生徒の部屋とその隣の部屋にも教職員が宿泊した。

舎務主任と生徒との話し合いが持たれ、日課表・洗濯・入浴などの変更が伝えられた。外出も寮母がついて30分以内と変更した。生徒からは「まだまだ余震が怖い」という声が多く聞こえた。

寄宿舎に残った生徒(理療科)から2名、教員4名と共に、避難所になっている体育館へマッサージのボランティアに行く。

「私たちは臨床をやっているのだから、避難している人に何とかボランティアをすることができました。結構年をとってる人もいらっしやったから、悲しかった。交流できてよかった」

「こんなに寒いところに寝泊まりしているのって、つらそう。ようおれるなあ。よく凝ってた」と、感想を述べている。避難住民にも、「うまいね」「ありがとう」「気持ちよかった」「楽になった」と喜んでもらい、生徒たちにも大きな励みになったのではないだろうか。

2月11日開舎。2月13日寄宿舎において、深夜地震を想定し避難訓練を実施。いつもの訓練より幾分緊張気味であった。